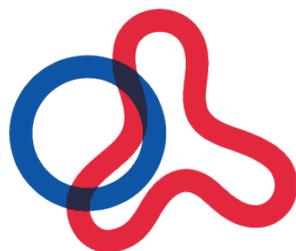


# Humanware Symposium 2023



## Osaka University Humanware Innovation Program

ヒューマンウェアイノベーション博士課程プログラム

ヒューマンウェア融合領域研究2023年度報告書

Project Leader: Tanigaki Kei



## 目次

1	<b>イントロダクション</b>	1
1.1	概要 . . . . .	1
1.2	背景 . . . . .	1
1.3	目的 . . . . .	1
2	<b>メンバー構成</b>	2
3	<b>事前準備</b>	3
3.1	運営体制 . . . . .	3
3.2	企画班 . . . . .	3
3.3	広報班 . . . . .	3
3.4	調整班 . . . . .	3
3.5	評価班 . . . . .	3
4	<b>イベント内容</b>	4
4.1	概要 . . . . .	4
4.2	アジェンダ . . . . .	4
4.3	企画 . . . . .	5
5	<b>評価</b>	6
5.1	参加者の満足度に関する評価 . . . . .	6
5.2	イベントの目的に関する評価 . . . . .	6
5.3	イベントの魅力についての評価 . . . . .	8
5.4	参加者からの声 . . . . .	8

6	財務	9
7	今後の改善点	10
8	まとめ	11
9	謝辞	11
10	付録	11
11	講師からのコメント	6

## 1 | イントロダクション

### 1.1 | 概要

本報告書は、ヒューマンウェア融合領域研究の一環として 2023 年 12 月 1 日に豊中キャンパスの基礎工学国際棟で開催されたヒューマンウェアシンポジウム 2023 に関するものである。本イベントは「あのヒューマンウェア生は今？」をテーマに、過去と現在のヒューマンウェア生が集結し、個々の進歩と経験を共有することで参加者に新たな視点を提供することを目的としている。本報告書は、ヒューマンウェアシンポジウム 2023 に関連する活動の準備、実施、成果を詳細に記述し、参加者の意見や今後のイベント向けの改善提案を含む。

### 1.2 | 背景

ヒューマンウェア博士課程プログラムには優秀な先輩が多くいるが、私たちがその先輩方について詳しく知る機会はほとんどなかった。逆に先輩方も、現在のヒューマンウェアの状況や、当時の同期や後輩のヒューマンウェア生が現在どのような状態にあるのか、知らないことも多い。そこで、本イベントでは歴代のヒューマンウェア生が各々の経験を語り合うことで、参加者一人一人が互いから学び、各々の人生にプラスの影響をもたらすことを目的としている。

また、イベント企画者自身、ヒューマンウェアプログラムに在籍しており、博士課程に進学予定だが、博士課程を卒業後どのように社会で貢献しているかについて、明確なイメージを持つことができていない。そのため、ヒューマンウェアプログラムを卒業した先輩方が現在何をしているのか、また、ヒューマンウェアや博士課程での生活をどのように過ごしていたのかを聞き、自分の人生に活かしたいと考えている。

### 1.3 | 目的

本イベントの主な目的は、ヒューマンウェア生が互いに現在の状況を語り合い、それぞれの人生に新たな視点を提供することである。しかし、参加者の立場によって参加するモチベーションが異なるため、ここでは参加者として想定される、ヒューマンウェアを検討している学部生、現役のヒューマンウェア生、ヒューマンウェアの OB/OG の三つに分けて目的を設定した。以下がそれぞれの参加者に対する目的である。

- ヒューマンウェアを検討している学部生
  - ヒューマンウェアに関する理解を深める。
  - 博士課程の生活や進路に関する知識を得る。
  - モチベーションを高める。
- 現役ヒューマンウェア生
  - 先輩の話から人生のビジョンを形成する。
  - 新しい視点を得る。
  - モチベーションを高める。
- ヒューマンウェアの OB/OG
  - 旧友との交流を楽しむ。
  - 新たな交流の機会を創出する。
  - モチベーションを高める。



## 2 | メンバー構成

### ■ リーダー

- 谷垣 慶

### ■ サブリーダー

- 西岡 詩歩

### ■ 企画班

- 波多野 遥太 (リーダー)
- Durrani Ird Ali
- 坂本 有紀
- Xu Chenfei
- 松井 徹太
- 村岡 朋花
- 渡邊 理翔

### ■ 広報班

- 清水 友貴 (リーダー)
- 星牟禮 健也
- 能澤 怜奈
- 平野 空暉
- 田村 優香
- Yuan Yucong

### ■ 調整班

- 小谷 尚輝 (リーダー)
- Fengkai Liu
- Guo Houjian

### ■ 評価班

- PIAO XIHAO (リーダー)
- 小峠陸登
- 東口慎吾

## 3 | 事前準備

### 3.1 | 運営体制

#### 3.1.1 | チーム構成

ヒューマンウェアシンポジウムは、リーダー、サブリーダー、および企画班、広報班、調整班、評価班の各班に分かれて運営された。初期段階では、リーダーが Google ドキュメントを用いてイベントの企画書（添付ファイル”HW シンポジウム企画書.docx”）を作成した。企画書は、イベントの目的の明確化と各チームの役割の明確化に重点を置いて作成した。

#### 3.1.2 | ミーティング

イベントの運営準備は、2週間ごとにリーダー、サブリーダー、各班のリーダーを集めたミーティングによって行われた。本ミーティングは、主に各チームが完了したタスクと次の2週間の目標をドキュメント（添付ファイル”HW シンポジウム リーダーミーティング.docx”）に記録する形で実施した。各班リーダーには、リーダーのビジョンを伝えつつも、彼らの自主性を尊重し、自由に活動してもらう形を取った。

#### 3.1.3 | スケジュール管理

各チームには初めにマイルストーンを達成するための大まかなスケジュールを設定し、スケジュール通りに進行していない場合は、Slack を通じてリマインドを行った。

### 3.2 | 企画班

企画班では、週一回のミーティングあるいは slack 上で週一回の進捗確認を行った。11月までは講演者の選定、シンポジウムの場所とスケジュールの決定をした。11月に入ってから必要な物品の調達、当日の詳細なスケジュールの決定を行った。企画班として行ったことは決めるところまでで、講演者への連絡や参加者へのメールは広報班と連携して行った。

### 3.3 | 広報班

初期の打ち合わせで各々で仕事を分担し、その後は主に Slack 上で進捗確認を行った。主な仕事内容は、広報用のチラシと当日配用いるパンフレットの作成、印刷、配布。加えて、参加申し込みフォームの作成と、参加者または参加希望者からのメール問い合わせ対応。

### 3.4 | 調整班

企画班が選定した講演者の方々へ連絡し、ご講演依頼を受けていただけるか、受けていただける場合は何日が可能であるかの集計を行った。その後別グループとも相談のうえで日程を決定し、ご都合に沿った講演者の方へは正式な依頼、ご都合に沿えなかった講演者の方へは調整が可能であるかの確認のご連絡をした。正式に決定された方々への旅費、謝金申請を事務局や担当の先生方と連絡を取りながら手続きを行った。また関係者に対してシンポジウム開催の案内をメール通知した。

### 3.5 | 評価班

評価班では、週一回の対面ミーティング+週数回程度のオンラインファイルの共同編集で、アンケートの設計・作成や評価書のテンプレートの作成を行った。

## 4 | イベント内容

### 4.1 | 概要

#### 4.1.1 | 日時

2023 年 12 月 1 日（金）13:00～18:00

#### 4.1.2 | 場所

豊中キャンパス国際棟

#### 4.1.3 | 参加者数

60 名（以下内訳）

- OB/OG：9 人
- 教員：4 人
- 博士 3 年：3 人
- 博士 2 年：3 人
- 博士 1 年：5 人
- 修士 2 年：17 人
- 修士 1 年：13 人
- 学部 4 年：5 人
- 学部 1 年：1 人

### 4.2 | アジェンダ

12:00 – 13:00 会場準備

13:00 開始

13:00 – 13:10 挨拶

13:10 – 14:30 講演 20 分 × 4

14:55 – 15:00 休憩・準備

15:00 – 16:00 ポスター発表

- 15:00 – 15:30 アブストラクトを順に前で発表 (3 分 × 9 チーム)

- 15:30 – 16:00 各ポスター前で待機

16:00 – 16:10 締めの挨拶

16:10 – 16:30 交流会準備

16:30 – 18:00 交流会 (立食パーティ形式)

18:00 シンポジウム終了

## 4.3 | 企画

### 4.3.1 | HWIP 修生からの講演

本年度のシンポジウムでは「あのヒューマンウェア生は今？」というコンセプトに合わせて、HWIP 卒業生 5 人に講演を依頼した。講演者、所属、略歴は付録の表 10.1 に示す。講演では主に博士後期課程や就職までの経験、現在の大学や会社で行っていることを講演して頂いた。発表時間は 15 分で質疑応答を 5 分設けた。

### 4.3.2 | 融合研究ポスター発表

学生主体融合領域研究支援経費を獲得している班、及び 11 期生が「ヒューマンウェア基礎論Ⅱ」の授業で作成した班にポスターの作成を依頼し、シンポジウム内で研究の概要を発表してもらった。発表した研究のタイトルと代表者の名前を付録の表 10.2 に示す。発表した後にポスターの前で自由に質疑を行う時間を約 40 分間設けた。

### 4.3.3 | 交流会

昨年度とのシンポジウムとは異なり、本シンポジウムでは交流会を開催した。本シンポジウムの目的はヒューマンウェア履修生と OB・OG 同士が知り合うことで研究や進路に新たな視点をもたらすことであった。そのため交流会を実施することで食事を介しながらの交流によって発表内容に限らない交流を活発にすることが狙いであった。交流会の形式は、立食パーティの形式を採用し、会の始めの立ち位置はくじ引きによりランダム性を持たせた。立食パーティであることで移動の流動性を上げ、既存の人間関係に固まらないためにランダムな出会いを設計した。

交流会に対する事後アンケートからは、72.2%の参加者は非常に満足、22.2%の参加者が満足と 94.4%の参加者でポジティブな結果が得られた。更に新しい人脈や交流を得ることが出来たと 55%、ややできたと 25%の 80%の参加者が回答した。アンケート結果より、本シンポジウムで新たな出会いを 8 割の参加者に提供し目的を十分達成することが出来た。交流会の満足度も高く、交流会が目的の達成に寄与したと考えられる。

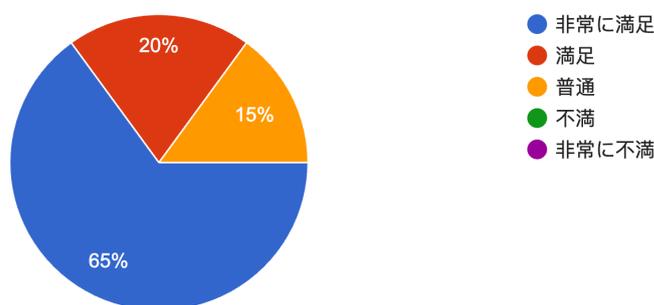
## 5 | 評価

本企画の開催にあたり、内外の参加者に向けて配布資料にアンケート QR コードを添付する形でアンケート調査を実行した。

### 5.1 | 参加者の満足度に関する評価

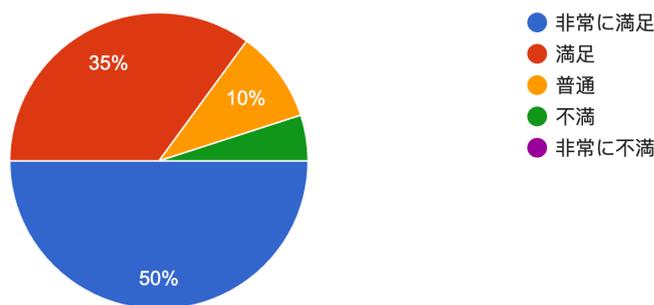
参加者の全体的な満足度について、「非常に満足」・「満足」と答えた参加者の数は 85%であった。

今日のイベントについて、全体的な満足度を教えてください。



続いて、講演に対する満足度について、「非常に満足」・「満足」と答えた参加者のも 85%であった。

今日のイベントにおける講演の内容に関して、どの程度満足しましたか？

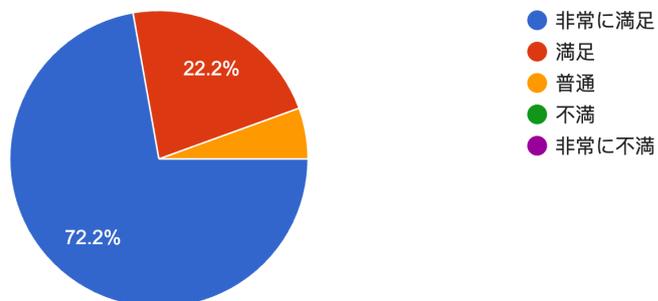


続いて、最後の懇親会に対する満足度について、「非常に満足」・「満足」と答えた参加者のも 94.4%であった。

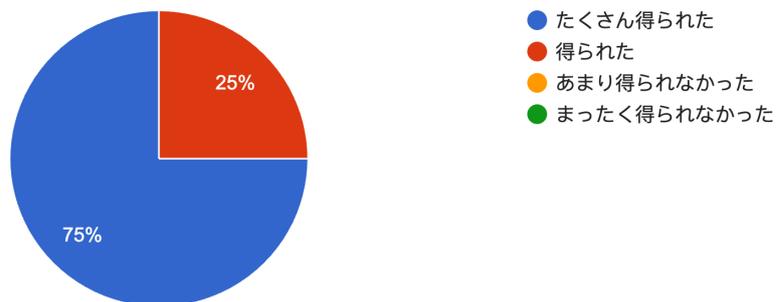
### 5.2 | イベントの目的に関する評価

今回のイベントの目的は、内外の参加者が互いに情報を共有できる空間を作ること、そして HW の魅力を外部の学生に伝えることである。今回のアンケート調査で、「参加者が交流できたかどうか」と「外部の参加者に HW のことを伝えたかどうか」について調査した。

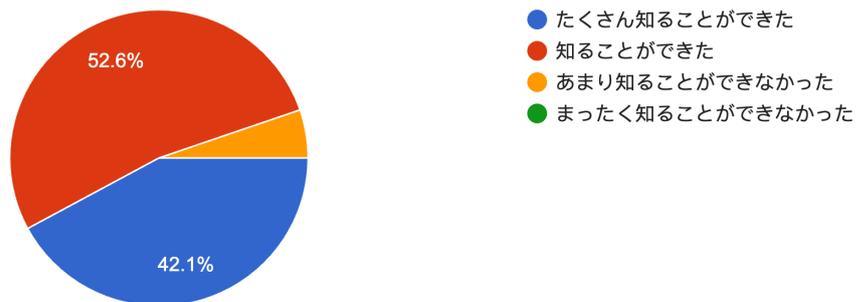
交流会(懇親会)の内容に関して、どの程度満足しましたか?



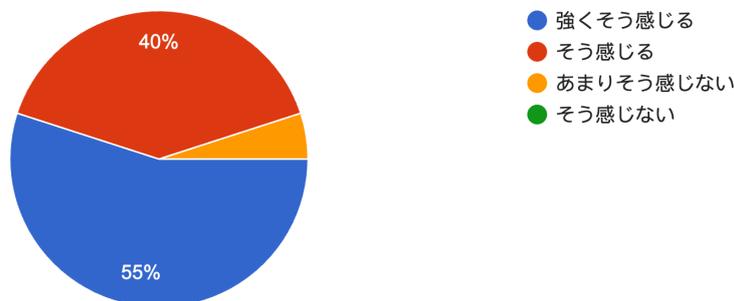
再会や新しい交流の機会が得られましたか? (OB/OG向け)



今回のイベントにおいて、HWや博士課程について詳しく知ることができましたか?



HWや博士課程の魅力について、より理解できましたか？



### 5.3 | イベントの魅力についての評価

ヒューマンウェアシンポジウムはHWの活動の一環として、毎年開催する重要なイベントである。今年のヒューマンウェアシンポジウム2023では初めて「あのヒューマンウェア生は今？」をテーマに、新たなテーマと開催形式（過去の履修生の講演+ポスター発表+懇親会）を試した。新たなイベントの魅力の評価、そして来年からのイベントの計画の参考になるため、参加者の来年以降のイベントへの参加意欲を調査した。結果として、「ぜひ参加したい」と「参加したい」と答えた参加者の数が95%であった。

### 5.4 | 参加者からの声

今回のアンケート調査では、参加者に特に印象的だった点や改善してほしい点について記述してもらった。参加者の声は以下になる：

#### ■ 全体的な感想

- 「久々にHWのみなさんとからめて良かったです！」
- 「またあったらきます！」
- 「運営ありがとうございました！！」
- 「ありがとうございました！」
- 「企画運営ありがとうございました。」
- 「皆さんお疲れ様でした！ また来年に会おう！」

#### ■ 印象的な点・改善してほしい点

- 「座席をくじ引きで決めるのは良いと思った。」
- 「融合研究を積極的に進められており、感心いたしました。今後の活躍を期待しています。また、懇親会はたくさんお酒を出してくださいありがとうございました。特に日本酒が最高でした。また機会がありましたら是非呼んでください。」

## 6 | 財務

本シンポジウムで使用した経費の一覧を以下に示す。

表 6.1: 本シンポジウムでの使用した経費

品名	数量	単価 (円)	金額 (円)	使用用途
お値打ちにぎり 5 人前	5	8750	43750	交流会食事
オードブル	5	6600	33000	交流会食事
いろはす天然水 2LP	3	154	462	交流会飲料
綾鷹 2LP	3	248	744	交流会飲料
煌烏龍茶 2LP	2	248	496	交流会飲料
ミッツメイト` Qooオレヅ` 950P	2	222	444	交流会飲料
ミッツメイト` Qooリンゴ` 950P	2	222	444	交流会飲料
ユカ・ユラ 1.5LP	2	298	596	交流会飲料
アケリアス 2LP	2	318	636	交流会飲料
午後の紅茶 ミルキー 1.5L	1	328	328	交流会飲料
午後の紅茶 レモンティー 1.5L	1	328	328	交流会飲料
サントリー天然水 550P	28	108	3024	シンポジウム参加者用飲料
綾鷹 525P 550P	27	138	3726	シンポジウム参加者用飲料
チラシ 200 部	1	4914	4914	広報用
		合計	92892	

## 7 | 今後の改善点

- ポスター発表者との連絡を円滑にするため、専用の Slack チャンネルを設置する。
- イベント中のマイク管理担当者を配置する。
- 融合研究のプレゼンテーション資料はイベントの一週間前までに集める。
- シンポジウムの目標を運営メンバー間で解像度高く周知する、特に広報資料作成時には、その目的が共有されていることを確認する。
- 教員や経験者からの意見を積極的に求める。もし誰に聞いていいかわからなかったら本イベントの責任者である 10 期生 谷垣 慶まで Slack を飛ばしてもよい。
- 余裕を持ったスケジュールリングを心がける。
- 当日のスケジュールも予定より遅れがちなので当日のスケジュールも余裕を持って設定する。
- 組織としての構造をはっきりさせておく。各班のリーダーは何を任されていて、何を割り振らないといけないのかを把握しておく。
- メンバーごとの準備への貢献度を統一する。(難しい)
- 講演者に事前にどのようなコンセプトのシンポジウムかを伝えておく。期待する発表内容を伝える。

## 8 | まとめ

今年度のヒューマンウェア融合領域研究では、「あのヒューマンウェア生は今？」をテーマにヒューマンウェアシンポジウム 2023 を実施した。本イベントは、過去と現在のヒューマンウェア生が個々の進歩と経験を共有することで、参加者に新たな視点を提供することを目的として実施された。イベント内では、講演、ポスター発表、交流会を実施し、参加者間の情報共有と交流を促進した。事後アンケートからは、イベント全体に対して高い評価を得ることができ、有意義なイベントを提供することができたと言える。

しかし、本イベントの成功の大きな要因はヒューマンウェア生、およびヒューマンウェアに関わる事務、先生方の温かさによるものである。イベント参加者 60 名中、アンケート回答者が 20 名というのは、通常ではありえないほど回答率が高く、ヒューマンウェアに関わる方々の人柄の良さを物語っている。私自身、これからもヒューマンウェアコミュニティに貢献していきたいと思うと共に、次世代のヒューマンウェア生たちもこのような温かさを受け継ぎ、発展させていくことを心より願う。

## 9 | 謝辞

本シンポジウムの成功のため、発表者の皆様、先生方、事務局のスタッフの方々からのご支援とご協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。特に、貴重な知見をお話しいただいた高様、三田様、村上様、平岡様、濱屋様、そしてイベントの準備と進行にご尽力いただいた澤田様、下村先生、細田様、谷川様へは、深く感謝の意を表します。また、多忙な平日の午後にもかかわらず、ご参加いただいた皆様にも厚く御礼申し上げます。さらに、本イベントは、大阪大学博士課程教育リーディングプログラムの補助のもとで開催されました。ここに、ご支援に対する感謝の意を表します。

## 10 | 付録

表 10.1: 講演者の所属と略歴

講演者	現在の所属	略歴
高博奇 (3 期生)	株式会社メルカリ シニア検索エンジニア	博士課程ではセンサネットワークに機械学習を応用する研究に従事。修了後は Yahoo Japan, メルカリで共に検索エンジニアとして活躍。検索の最新技術, LLM の応用, Robust なシステムデザイン, 0to1 の新規サービス立ち上げなどに関心がある。
三田真志郎 (4 期生)	eMotto 株式会社 代表取締役 / 創業者	博士課程では学術振興会特別研究員として視覚認知機構の研究を行いつつ, 挫折しない電子楽器「ParoTone」を提供する eMotto 株式会社を起業。彼の情熱は, 音楽と技術の融合から, 楽器の習得のハードルを下げ, 多くの人々に音楽の楽しさを提供すること。
村上雅哉 (3 期生)	面白法人カヤック ゲーム事業部長	博士課程で「脳の情報通信メカニズムの情報ネットワークへの応用」を研究した後, 面白法人カヤックに入社。「僕らがつくったゲームがデジタルマーケティングを駆使し, 世界中に配信され, 現在 5 億ダウンロードを突破しています。今後の人生では, 世界にもっと感動を届けていければと思います。」
平岡陽花 (2 期生)	名古屋大学大学院 理学研究科 特任助教	専門は細胞生物学で, 多細胞組織における細胞の不均一性に興味を持ち, 細胞状態のばらつきが細胞集団・組織にもたらす影響の理解を志す。状態の異なる細胞間で起こる適者生存競争「細胞競合」のメカニズムの解明を目指している。
濱屋政志 (2 期生)	オムロンサイニックス株式会社 シニアリサーチャー	オムロンサイニックス株式会社のシニアリサーチャーとして, ロボティクスの研究に従事。柔軟な身体と触覚を持つロボットの運動学習に興味を持ち, 研究活動に取り組んでいる。

表 10.2: ポスターのタイトルと代表者

代表者	研究タイトル
Li Aiyi	半自律的なリーダー・フォロワー型ドローン群運搬システム
Guo Houjian	遺伝子発現プロファイル解析における Posterior Collapse 問題及びその解決法
藤野 美沙子	マルチモーダル刺激に対する脳活動情報アノテーションモデルの提案
李 佰昂	CNV のニューロフィードバックによる集中状態の誘発・維持
小谷 尚輝	共感的なカウンセリングシステムの開発
三浦 康平	Q&A タスクにおける大規模言語モデルの応答能力を向上させる指示作成支援システムの提案
古志野 瑛元	ロボットの行動理由がユーザに与える印象の評価
片木 智一	脳情報計測技術を用いた価格情報が満足度に与える影響の調査
楠山 弘基	An Emotion-enhancing Semi-autonomous Ensemble System for Novice Performers

開催日

12/1 金

13:00～18:00  
(開場 12:30)

場所

豊中キャンパス  
基礎工 国際棟

参加費 **無料**

あのHW生は今?!

ヒューマンウェア

歴代HW生集合!!

博士課程に興味のある方も歓迎!

将来は研究者?

起業?!  
転職?!



# ヒューマンウェア シンポジウム2023

## 第1部 HW 修了生からの講演

あの HW 生は今何してる?  
歴代の HW 生の経験から未来をデザイン  
先輩の人生ストーリーで自分のビジョンを明確に!

## 第2部 融合研究 ポスター発表

融合研究の最前線!  
革新的なアイデアをポスターから学ぼう!

## 第3部 懇親会 (食べ飲み無料)

先輩・後輩・同期との繋がりを深めて  
楽しい懇親会で未来のネットワークを築こう!  
2,000~3,000円分の軽食を無料で食べられます!

### 参加対象

- HW 修了生 ▶ 懐かしい仲間との再会
- HW 履修生 ▶ 同期や先輩との交流
- HW に興味がある学部生  
▶ 博士ビジョンの明確化

### 自 申込方法

人数の把握のため  
右の QR コードから必ず  
参加登録をお願いします

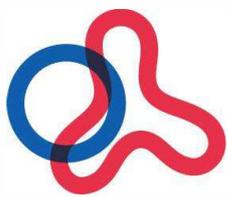
締切: 11/24 (金)



お問い合わせ: hw-sympo2023@humanware.osaka-u.ac.jp

阪大 ヒューマンウェア





Osaka  
University  
Humanware  
Innovation  
Program

## ヒューマンウェアイノベーション博士課程プログラム (HWIP)とは？

情報科学研究科・基礎工学研究科・生命機能研究科の学生が、自分たちの専門領域を超えた融合研究に取り組むプログラムです。異分野の学生との共同研究を通じて研究者としての視野を広げることができます。また、**メンター制度**や**研究活動支援**、**給付奨学金**などの学生支援も充実しており、研究に専念できる環境が整備されています。

情報科学研究科、基礎工学研究科、生命機能研究科の**博士前期課程に令和6年度入学予定、令和5年度4月または10月に入学**した方からのご応募をお待ちしております！

ご興味のある方は、ぜひシンポジウムに来て所属学生たちと交流しませんか？

### 講演者情報

アカデミア・企業研究者・起業・エンジニア・事業開発など  
多様なキャリアを歩む博士課程修了者5名による講演を予定



株式会社メルカリ  
シニア検索エンジニア

**高博奇氏**

HW 3期生 / 情報科学研究科卒

博士課程ではセンサネットワークに機械学習を応用する研究に従事。修了後は Yahoo Japan、メルカリで共に検索エンジニアとして活躍。検索の最新技術、LLMの応用、Robustなシステムデザイン、Oto1の新規サービス立ち上げなどに関心がある。



eMotto 株式会社  
代表取締役 / 創業者

**三田真志郎氏**

HW 4期生 / 生命機能研究科卒

博士課程では学術振興会特別研究員として視覚認知機構の研究を行いつつ、挫折しない電子楽器「ParoTone」を提供するeMotto株式会社を起業。彼の情熱は、音楽と技術の融合から、楽器の習得のハードルを下げ、多くの人々に音楽の楽しさを提供すること。



面白法人カヤック  
ゲーム事業部 部長

**村上雅哉氏**

HW 3期生 / 情報科学研究科卒

博士課程で「脳の情報通信メカニズムの情報ネットワークへの応用」を研究した後、面白法人カヤックに入社。「僕らが見つけたゲームがデジタルマーケティングを駆使し、世界中に配信され、現在5億ダウンロードを突破しています。今後の人生では、世界にもっと感動を届けていければと思います。」



名古屋大学大学院  
理学研究科 特任助教

**平岡陽花氏**

HW 2期生 / 生命機能研究科卒

専門は細胞生物学で、多細胞組織における細胞の不均一性に興味を持ち、細胞状態のばらつきが細胞集団・組織にもたらす影響の理解を志す。状態の異なる細胞間で起こる適者生存競争「細胞競合」のメカニズムの解明を目指している。



オムロンサイニクエックス  
株式会社 シニアリサーチャー

**濱屋政志氏**

HW 2期生 / 生命機能研究科卒

オムロンサイニクエックス株式会社のシニアリサーチャーとして、ロボティクスの研究に従事。柔軟な身体と触覚を持つロボットの運動学習に興味を持ち、研究活動に取り組んでいる。

### こんなことお話しします！

ヒューマンウェアの魅力  
博士課程後の進路  
博士課程の生活  
などなど...



### プログラム内容

- 12:30 開場・受付
- 13:00 **HWIP 修了生からの講演**  
HWIP 修了生の話を聞いて  
博士課程進学をイメージしよう！
- 15:00 **融合研究 ポスター発表**  
プログラム内で行われている  
融合研究の内容を覗き見してみよう！
- 16:00 **懇親会（軽食あり）**  
HWIP 在籍生や修了生と自由に議論  
交流しましょう！
- 18:00

### 会場案内

@大阪大学  
豊中キャンパス  
基礎工学 国際棟



お問い合わせ

ヒューマンウェアシンポジウム2023運営実行委員会  
hw-sympo2023@humanware.osaka-u.ac.jp

参加申し込み

Google Form から  
お申し込みください  
締切: 11月24日まで



## アンケート資料

### Q1. 本講義を受けて学んだこと、成長したこと、反省など 100 文字以上で記述せよ。

Describe what you learned in the course and the symposium, in more than 50 words.

#### ■ 清水友貴

自分たちのチームは他のチームと違い、基礎工学研究科でメンバーが固まってしまい、融合研究とは言えないチーム構成でしたが、それでも専門とする研究内容は違いっており、同じ研究科でも、同じ興味を持っていると言うだけで研究を推進することは非常に難しかったです。とても良い経験になったので、来年度からは別領域の学生の方ともより多くの議論や融合研究を通して成長したいからばと思います。

#### ■ 東口慎吾

イベントを運営する側に回る経験は初めてであったため、運営側の基本的な活動方法について学ぶことができた。

具体的には、企画、広報、評価などの複数の班に分かれ、それぞれの班にタスクを割り振りながらリーダーがそれを管理するという進め方は、とても理にかなっており、自身の今後の活動に活かせると感じた。

反省点としては、運営の中心的な役割である「プレゼンターを選定してアポを取る段階」に関わることができなかったことが挙げられる。この段階に関わることであれば、社会に出てからも役に立つような貴重な経験が得られていたと感じた。

#### ■ 西岡詩歩

本講義で学んだことは、計画したイベントの開催に向けて自主的に行動し、他者と協力することの大切さです。計画したイベントの対象者は誰なのか、その目的は何なのか、どのような内容にすれば参加者が有意義な時間を過ごすことができるのかなど、今後イベントの開催を行う上では重要となることを学べました。私は、これまでイベントにはあまり積極的に参加する方ではなく、人任せにしてしまう部分があったのですが、今回初めて企画側にまわり、運営に携わる側になり、せっかくの機会だったので、思い切って積極的に行動を起こすようになりました。当日、ほとんど役に立てなかったことは反省点ですが、より良いイベントを周りの履修者の方と協力して実施することができ、イベント終了後には消極的な自分から成長できたと感じました。

#### ■ 波多野 遥太

私は本シンポジウムの準備に際して、企画班のリーダーを務めた。

準備のために他の班のリーダーとの連携や、班員への連絡はこまめにするようにし、班の透明性が高くなるように努力した。

連携をとりながらシンポジウムを達成しきったことは貴重な経験だったと思う。

反省点としては全員ぐらいの分量のタスクを割り振れなかったこと、目玉となる企画を打ち出せなかったことがあげられる。事後処理が少し雑になってしまったことも反省したい。

一方で大きなミスなくやり切れたのは非常に良かった。

#### ■ 坂本有紀

大規模なイベントを主催したのは初めてだったので、当日のスケジュール管理など、学びは多かったです。私は企画班として講演者や会場選定、会場準備などに携わらせていただき、イベントの企画から運営までの全体的な流れを理解することができたと思います。

#### ■ 能澤伶奈

本講義を受講して、イベントの企画・運営の難しさと喜びを経験することができました。特に班内や他班の方々との連携を取るのが難しく、誰が何をすべきかの分業が適切に行えない時もありました。一方で班のリーダーが忙しい時は、出来る人が代わってリーダーシップをとるなど、各自が主体性を持って講義に取り組んでいたと思います。シンポジウムを形にすることができ嬉しかったです。

#### ■ 渡邊理翔

本講義は、アウトリーチのための科学コミュニケーション手法がテーマであった。

学んだこと：コミュニケーション手法は大まかに同一研究室であるか、同一分野であるか、研究者であるかのレイヤーに分けられる。それぞれでの内容の粒度を変えることと相手の知識を推定することによる自分の研究を相手に伝えられる重要性を学んだ。研究者である人に向けた内容では、シンポジウムでの招待講演とポスター発表が参考になった。

成長したこと：今回発表を担当しなかったため、上記コミュニケーション手法を試すことよりも、シンポジウム運営に関するスキルは成長した。シンポジウムの目的に対して適切かつ効果を最大化する企画を立てることであった。

反省：群衆の誘導には少し手間取り、次にどこに動けばいいかの誘導は十分ではなかった。また全体の運営に気を使いすぎ、自身が各個人と交流を持つという目的が十分には達成できなかった。周りのメンバーともう少し協力体制を作るべきであった。

#### ■ 松井徹太

本講義を受けて何かを開催する上で色々な調整が必要であり、多くの人を巻き込むことで成功するのだと学んだ。全体でしっかりと連携をし、必要に応じてミーティングを行うなど臨機応変に対応できたので良かったと考える。

#### ■ 平野空暉

このコースを受講することによって、Humanware のアウトリーチ活動に貢献できるとともに、自分の行っている研究を研究分野外の人に説明する貴重な機会となり、発表の方法等を多数学ぶことができた。また、Humanware の卒業生と交流ができ、興味深いキャリアを歩んでいる人の話を聞くことができて、価値観が広がった。

#### ■ 小谷尚輝

本講義では、シンポジウムを運営するにあたって、実際にどのような点を考慮する必要がある、どのような点で苦勞することになるのかを学ぶことができた。私は講演者の方々へ依頼を行い、調整を行う役割を担った。その中で、どのような連絡をする必要がある、お互いの希望を折衷することの難しさを知った。一方で、運営は初めての経験となる中で、予め余裕のある計画を立てることができず、想定していなかった部分で時間がかかってしまい全体に遅れが生じてしまうなど、見込みの甘さは反省しなければならない。

#### ■ 村岡朋花

シンポジウムをゼロから組み立て開催することの難しさを感じた。そもそも誰を対象に開くのかということから、それを満たすために、何をするかといったコンテンツ、講演者として誰を呼ぶのかなどの大きな内容、そしてどのようにして集客を図るのか、席順をどうするのか、などの細かいところまで、全てにおいて筋を通すことが最も難しかった。迷いが生じた際には、シンポジウムの目的に立ち返ることの重要性を学んだ。



■ 谷垣 慶

本講義では全体のリーダーとしてHW シンポジウムの企画・運営を行った。今までもイベントやチームの運営などの経験はあったものの基本的に参加者が有志であったため、人にタスクを振る際に気を使ってしまいタスクを振るということに苦手意識があった。今回は授業ということもあってメンバーに気兼ねなくタスクを振ることができ、人にタスクを振ることの重要性や、その際に気を付けるべきことを学ぶことができた。今後はより心理的安全性やチーム全体の透明性を意識してチームマネジメント能力を磨いていきたいと思う。

■ YUAN YUCONG

In this course I learned the importance of working with others. As a member of the publicity department, collaborating with others brings together individuals with different backgrounds, experiences, and perspectives. This diversity can lead to innovative ideas and creative solutions to problems that may not be possible when working alone. Working in a team allows for the division of labor, where tasks are distributed based on each team member's strengths and expertise. This often results in increased efficiency as individuals can focus on what they do best.

■ PIAO XIHAO

After this event, I have three main points of reflection. Firstly, organizing such collective activities requires clear planning and organization. Instead of focusing on individual opinions about certain details, it is more crucial to implement the solutions discussed during the meeting efficiently. I am immensely grateful for Leader Tanigaki's excellent organizational skills and the team members' cooperation.

Secondly, striking a balance between conducting research work and participating in collective activities like this is of utmost importance. Due to the need for my academic conference submissions at the same time, time constraints were a challenge, and many tasks required coordinated planning with others to be completed successfully. I also appreciate the assistance the HW Committee provided, which afforded us ample time and established a communication channel through Slack.

Lastly, effective communication within the team is paramount. In this event, my team members, Kotouge and Higashiguti, are fellow students from the same laboratory, making communication effortless and significantly enhancing our work efficiency. I am also very thankful for their cooperation.

■ XU CHENFEI

I attended the event and also participated in preparing the symposium. This course offered me an opportunity of communicating with other Japanese students and making a solid plan for an academic event. I haven't had chances of getting familiar with this kind of event in Japan before. So it was quite a good time that I heard a lot of interdisciplinary studies from graduated students and other classmates. I learned how they succeeded and their success can serve as a valuable reference to me.

■ Houjian Guo

Communication with other researcher is very important. We can acquire knowledge from papers and books, but in most of the time, they are out of the date. Based on the old knowledge is worse than obtaining new knowledge. Talking with researchers in the similar research direction can be a very valuable experience for your research.

Q2. この講義、シンポジウムに対するフィードバック。必ず良い点（残すべき点）と、悪い点（改善すべき点）を併記し、総じて改善案を記入せよ。100 文字以上。

Any feedback on this symposium and course. Describe both pros and cons, and your idea for making it better. More than 50 words.

■ 清水友貴

良い点

自分たちだけでテーマを決め、新規性から実験デザインまで作りきる経験は、研究室にいてもあまり経験できることではなかった。他メンバーと足並みを揃えて一つの形にするという経験がとても貴重だったと思う。さらにそれを他の人に発表する機会としてシンポジウムが設定されているところもよかった。わかりやすく融合研究について説明するための練習として機能していたと思う。

悪い点

同じ研究領域のメンバーでチームが構成されてしまったこと。募集人数にもよるが、興味からチームを構成すること、領域のバランスを考えてチームをつくるべきだった。

■ 東口慎吾

さまざまなフィールドで活躍しておられるヒューマンウェアの先輩方から直接お話を伺える機会となった点はとても有意地であった。

一方、プレゼンター以外の方でどのような方が参加しているのかがわからなかった点が改善点であると感じた。

参加者の簡単な自己紹介の時間を設けたり、自己紹介文を当日配布の資料に含めるなどがあれば、「この人に話を聞きたい」という人を見つけて話を聞きに行くことができたと感じた。

■ 西岡詩歩

イベント開催にあたり、この講義ではイベント開催において意識すべきさまざまなことを知ることができ、ディスカッションを通してより明確化したイベントプランを作り上げることができたと思います。また、各々がイベント従事者の一員となり、各グループでミーティングを自主的に行うことができたことも良い点だったと思います。さらに、今年度行った HW の履修生の方との交流をすることができたのも良かったと思います。一方、改善すべき点としては、言語の壁です。日本語を話せない、聞き取れない学生にとって、シンポジウムは有意義だったのかわからないからです。この点において、もっと留学生にも適応した対応ができれば良かったのではないかと思います。

■ 波多野 遥太

学生がコンセプトを考えて、それを自由に企画できるというのは非常に良い点だと思うので残しておくべきである。また、教員のサポートも現在の形式でちょうど良かったように思う。また、HW1 期生の澤田さんが企画の段階からサポートしてくださっていたことが非常に良かった。お一人の負担になってしまうのは申し訳ないとは思いますが、OBOG が関わりながらシンポジウムを作り上げるというスタイルは是非残していただきたい（OBOG も関わってきやすくなりそうだし、現役もやりやすいと思う）。

シンポジウムの企画内容等の反省点はあるが、授業としての改善点は特に思いつかなかった。強いて言うなら、評価のためにシンポジウムを企画したわけではないが、シンポジウムへの寄与度合いが個人ごとに違うのはどのように評価するのだろうかと思った。改善案としては無難に出席を取っておくとかが考えられる。



■ 坂本有紀

最初に対面講義があり，そこから各チームでの作業に移れたのが良かった。最初からすべてをオンラインで進めていたら，温度感などに差が出てしまっていたと思います。改善すべき点は，Slack でチャンネルがたくさんあり，どこに何の情報があるかがぱっとわからなかった点でしょうか。各チームごとにパブリックチャンネルがあったと思いますが，各チームがどのタスクを行っているかを一覧で見られるファイルがあるとよかったと思います。全体がいまどのフェーズにあるかを，全員が共有できればよかったと思います。

■ 能澤伶奈

第三部の交流会で現役生・OBOG・学部生が和やかに交流できた点がとても良かったと思います。逆に改善すべき点としては，第一部での発言者が限られていたことだと思います。全員が積極的に質問をするなどして，第一部からより双方向的なコミュニケーションができていればより学びあるシンポジウムになったかと思います。

■ 渡邊理翔

良い点：博士課程の進路という直近の不安に関して，卒業生の顔や進路を見て考えなおすことと安心感を得ることが出来た。公式で懇親会を開くことで，普段交流を持ってない HW のメンバーや卒業生と知り合うことが出来た。

悪い点：博士号を取得していることが現在の仕事に活かされて価値があるかが，聴講者の多くがこれから博士号を取るというリスクに対する不安を解消できるはずであったが，一部の講演者ではその観点が重要視されていなかったと感じている。

改善点：今回の目的を達成するならば，講演者に対して議論を限定できるように事前に講演してもらうことであった。

■ 松井徹太

この講義では自由に色々なことを決めることができ、自分たちでシンポジウムを成功させるという経験をできるので非常に良いと考える。改善すべき点としては開催時期も、もっと自由度高く決められたら良かったと思う。全体として非常に貴重な経験をすることができたので良かった。

■ 平野空暉

同期以外の Humanware 生との交流ができる点、Humanware を卒業した先輩方のお話をたくさん聞くことができた点が良かった。一方で、準備の段階での情報共有が不足しており、どこまで学生で行わないと行けないかが明確ではなかったのが改善点だと考えている。

■ 小谷尚輝

良い点としては、ほとんどすべての過程を学生に一任されていたことである。学生間で相談し、主体的に動くことのできる環境であった。一方で、主に金銭面においてどのような際に事務局との連携が必要になるのかが予め知らされておらず、想定外の部分で時間を要することになったと感じた。すべてを想定することは困難であるが、予めこの点だけはなるべく明示していただけると、よりスムーズな連携が取れたのではないかと感じた。

■ 村岡朋花

まず、今回のテーマはとても良いものだった。在学生在が卒業生と関わる機会は今までほとんどなかったため、卒業後のことがわかりとても勉強になった。また、卒業生の方々同士が集まり、楽しそうに話をしている様子もとても印象に残っており、開催してよかったと思えた。改善すべき点としては、講演会の際に質問が出づらかった点だと思う。講演会というスタイルが原因であると考え、もう少し他のスタイルも検討してもいいかと思った。



■ 谷垣 慶

融合研究とは別にヒューマンウェアのメンバーでチームを構成し、何かを達成するという経験はヒューマンウェア内の交流を深めたり、チーム運営能力が磨かれたりとメリットが大きい。一方で、本授業は参加者が多いため、運営に深くかかわることができないメンバーが一定数存在することが今後の課題としてあげられる。この対策としては、イベントを2種類開催にするなどして、1チームのメンバー数を制限するといった方向性が良いだろう。リーダーとしてのチーム運営は非常に良い経験であり、リーダー経験を積む人数を増やせるという意味でもそういった方向性が”リーディング”プログラムとして適切であると考ええる。

■ YUAN YUCONG

What I think is good about this course is that it provides a platform to interact with seniors who have graduated. Seniors have a wealth of life experience. When individuals with different skills and perspectives come together, they can approach challenges from various angles, leading to more effective and comprehensive solutions. And this course also provides the necessary training in event planning. This type of training is very hard to find in many places and is taught by seniors who have had relevant experience. I think the bad thing about this course is the lack of publicity or influence for the younger juniors. I think that in future programs, we can consider involving some of the young people who are studying in the laboratory in the planning of activities, so as to increase the influence on young people as well as to enhance the learning ability of those who are studying in the laboratory.

■ PIAO XIHAO

In my opinion, this event had both its strengths and weaknesses. One of the strengths was the effectiveness of this event in terms of personnel allocation, team organization, and progress planning, mainly due to the experience gained from previous editions organized by senior members. This not only saved time for us students but also ensured the smooth execution of the event.

However, one of the weaknesses was the insufficient promotion of the HW project itself during this event. Since it was an offline event primarily focused on various academic presentations, its ability to attract external members was limited. The promotional efforts towards the target audience (B4 and M1 students) may need to be strengthened in the future.

■ XU CHENFEI

This symposium let us contact with previous students who have already graduated from HW project. I think it's quite interesting that we may find some guidances from their success and at the same time, they may see themselves on us. The discussions and communications were helpful and attractive. However, sometimes I am not quite familiar with some fields like biology or chemistry. Maybe next time there can be more backgrounds introduction about each lecture. I will appreciate it if they can offer some basic knowledge and enable us to discuss deeper.

■ Houjian Guo

Pros are the following: the poster from students are impressive, I learned a lot from other students. Other researchers also give us some advise for our research, which is meaningful. Con is that the room is a little small for such a large amount of people. In the next symposium, please choose a larger lecture room.

## 11 | 講師からのコメント

### ■ 澤田理沙先生

実際にイベントを企画・運営をしてみて、いかがでしたでしょうか？

意外と難しかった、事務的にめんどくさいことがたくさんあった、外部に対して（講演者依頼や参加者に向けて）だけではなく内部のコミュニケーションの大切さに気づいた等、いろいろあったのではないのでしょうか。専門研究、融合研究があるなかで、+α でイベントを企画するというはとても大変だったかと思いますがそれでも各々が協力して、アイデアを現実のイベントとして落とし込み、実現させたこと、本当にすごいです！ 今回の会、ターゲットを HW 生の交流に絞り（そして興味のある学部生には、ありのままの HW 同士の交流を見せて）、適切な規模感を想定し会場を決め、着々と準備を進められて、実際に当日も満員御礼の熱気のある会でしたね！！ 皆さんは楽しめましたでしょうか？ 一 OBOG 参加者として、私はとても楽しかったです！ ありがとうございます。

せっかくなので、もし今後もイベント企画・運営に携わる可能性がある方に向けて、少しだけフィードバックさせていただきます。Slack 上だけでしか追えていないので、見当違いなことを言ってしまうたら本当にすみません。。基本聞き流していただいて、「なるほど、これは使えるな」というアドバイスだけでも、もしあれば、受け取ってください。

- リーダーミーティングで Google doc を埋めていく方法、とても良いですね！ 私も参考にしたいと思いました。会議前の Agenda（議題）も、簡単でいいのでどこかで全体に共有できておいたら効率的かもですね。（もしあったらすみません）
- 卒業生のリストをもらったこと、大きいですね！ 今回講演しなかった人でも、気になる OBOG がいたら、そのリストをうまく利用して、谷川さんに相談してコンタクトすることも、今期のメンバーは可能ですね。細田先生もいっていたけど、先輩をうまく利用しちゃってください！
- 講演者とのやりとりもお疲れ様でした！ きっと OBOG のみんな、忙しい以外は好意的に承諾してくれたのではないかなと思います。今回はほぼ身内でしたし、それぞれ柔軟に思い思いのプレゼンを行っていてとても良かったですね。もし今後、外部の方に講演を頼む場合は、会の企画書や、応募締め切り時の最終的な参加者の構成（現役生が多い、学部生が多い等）を事前に伝えておくと、講演者へ安心感を与えられると思います！
- チラシかっこいい～～！ 色々な広報ルートもあらゆる手段を模索し、交渉して配布し、と、とても良かったと思います。イベント案内、訂正のメールも柔軟に対応していて◎！ 訂正メールは骨が折れますが、結構大切です。
- アンケート制作もお疲れ様でした！ とても大変だったかと思います。会の趣旨にあった項目を“必須項目”にしている、良いですね。参加者にイベント趣旨がちゃんと伝わり、満足させられたかどうかの評価をするのにバッチリだと思います。もし追加するとしたら、『何を見てこのイベントに応募しましたか』や『このイベントに何を期待して参加しましたか』という、広報に対する評価もあるとよかったかもしれません。また、今回のイベントには適さないかと思いますが、もし HW を長期的に広報していきたい、今後も継続的にイベントを行うので参加させたい、というのであれば、『今後も HW からのお知らせを希望しますか？』という項目があれば、次回イベントの告知用アドレスリストを Get することができます。
- 当日の段取り、司会、とても Good job でした！！ 構成もわかりやすいですし、フランクにたくさん交流できて楽しかったです。
- 次は報告書の作成などもあると思いますので、もし可能でしたら短くてもいいから「反省会」を開いて、今回のイベントについてアンケートを参考にしながら良かった点と反省点を話し合ってから報告書作成を行うと、より今回のスキルが身になると思います。
- もしアンケートの回収率が悪かったら、御礼メールを参加者全員に送り、会への参加御礼とアンケート協力の依頼を行うと良いです！

個人的な経験からして、イベント企画・運営というのは経験値がとても大きく影響するため、もし次イベントを企画するなどがあれば今回の経験は絶対的に役に立ちます。また、企画・運営には、課題解決能力、交渉力、柔軟性、チームマネジメント、相手の立場に立ったコミュニケーション、が必要になるため、汎用的なスキルも成長できたのではと思います。これはアウトリーチに関することだけではなく、社会に出て研究プロジェクトを回していくことに重要なスキルです。今回の経験が、皆さんの将来にとってポジティブなものであればよいな、と、心から願います。もし質問や気になったことなどあれば、私はいつでもオープンですので、slack DMでもメールでも気軽にご連絡ください！とにもかくにも、本当にお疲れ様でした！ 今後もHWを“うまく活用”して、目標に向けて頑張っていきましょう～！

#### ■ 下村

まずは、シンポジウムの企画お疲れ様でした。OBOGを巻き込んでの会とのことで特に「人の交流」が重要になるイベントだと思います。慣れていない事で企画の進め方も模索しながらでしたし、十数人で動かす企画だったので、マネジメントや班員としての立ち回りにも苦労したかと思います。その中でもまとまった企画を作り上げて無事に作り上げたこと、本当によくやっただとおもいます。教員としての立場ではありましたが、OBとしても楽しむイベントになりました。今回の経験を通じて、今後の活動の糧になってもらえれば幸いです。さて、今回のイベントHW生の縦横のつながりを作るための企画だったように思います。では、その結果どうなるでしょうか？それがイベントの成果と今後の課題になってきます。単発企画をやり通したことも成果ではありますが、イベントとしてどうであったかを振り返ることが重要です。各自で交流も繋ぐ努力もまた必要になってきます。今後この企画書を見ているであろうM2, M1も自分が体験したイベントについて総括してみると良いかと思います。

というわけで僕の総括としてフィードバックをしておきます。今後誰かの参考になれば嬉しいです。

- 今回のイベントでは、OBOGを呼ぶために土日開催したいという旨はこちらにいただいてました。ただ、呼びたい人に案内を送ったり調整したりして開催日の決定がだいぶ遅れてしまいました。澤田先生の講義にもあったように、企画は場所と日にちからスタートです。最低限の急がなくてはいけない案件は迅速にできれば、バタバタせずに企画の詳細を練れるかと思いました（まあ開催日と場所はこちらがもっと厳格に設定しておくべきだったとは思っております）。
- 講師とのやりとりについて依頼時に詳細を伝えず打診するといったことがありました。誰かを呼ぶ場合、その人が「来てよい」と判断できるような情報を提供した上で依頼をかけることが重要となります。今回の依頼内容はOBOGとしてお話ししてほしいと打診したようですが、基本的に「どんな内容について講演してほしいか」がわからないと講演がとてもやりづらくなります。今回はHW生ということもあって、ある程度の趣旨を想定して作ってもらえましたが、全く事情の知らない方を呼ぶ際には注意した方が良いでしょう。その対策として「イベントとして話してほしい内容」と「講師が話す内容」について打ち合わせとかするのがおすすめです。
- イベント費用をはじめとした金銭的やりとりは教員や事務の方の協力が必須です。故に少々時間がかかることを想定しておいた方がいいですね。
- 飲み会におけるエネルギーのかけ方はこれぞHW！と思えるくらいに楽しい内容でした！今回の企画でどこがメインイベントか各自で判断してもらいたいです。僕はあの飲み会こそがメインイベントではなかったかと思います。理由は好きなお酒を持ち込んだり、食べたいものを持ってきたり、お土産があったり自主性をすごく感じたためです。みんなが楽しいと思うような企画を作ってもらえると結果として盛り上がります。結局は熱量ですね。